母親

小瀧悠希那

ベランダの銀色の皿は、週に何回かだけ灰を溜める
無くてもいいと言いながら、何年も手摺りの角を陣取っているのだ
酒気を帯びて目尻を赤く染めながら、白煙を輪っかにしてみせてくれるのが
好きだった
主流煙が大袈裟な溜息になって帰ってくるような日は、触らぬ神になんとや
らと子供部屋に立て籠った
その依存性が身体を蝕むとわかっていても、
きっと必要なものなのだろうと思った

咳が酷くなった
気道が喘鳴をあげる音だった
誰も何も言わなかったのに、
翌日、ベランダに灰皿はなかった
右胸のポケットは、もう四角く膨らまない
鼻の奥が熱く痛んだ